

対談

新学習指導要領のねらいを実現する

これからの学習評価

来年度から学習指導要領が本格実施されます。それに先立って指導要領が示されました。これからの学習評価の在り方について、梶田、加藤両先生にそのポイントを話していただきました。



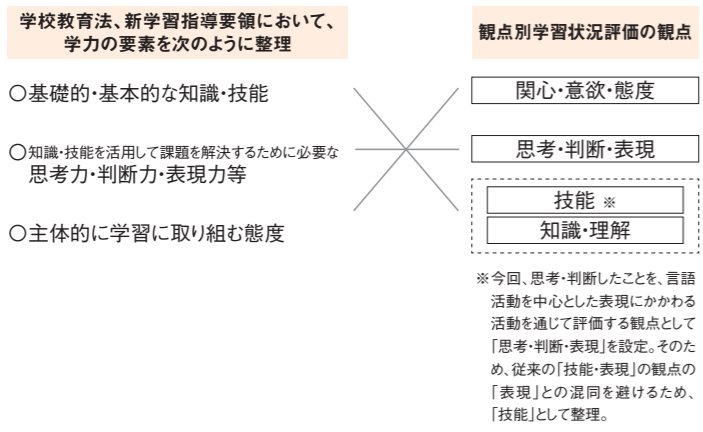
加藤 明

兵庫教育大学教職大学院教授／中央教育審議会専門委員  
かとう あきら\*兵庫県明石市生まれ。大阪教育大学大学院修了。大阪教育大学附属池田小学校教諭、ノートルダム清心女子大学助教授、京都ノートルダム女子大学教授(心理学部長)を経て、現職。

梶田 叡一

環太平洋大学学長／中央教育審議会教育課程部会長  
かじた えいいち\*松江市生まれ、米子市で育つ。京都大学文学部哲学科卒業。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長、兵庫教育大学学長などを経て、現職。文学博士。

学力の3要素と観点別学習状況評価の観点について



ていることから、評価がいままで以上に大事になります。

1992年(平成4年)と2002年(平成14年)の指導要領は、学習指導要領と必ずしも表裏の関係にはありませんでした。「ゆとり教育」を推し進めるというこゝろで、結果として子どもにどんな力がついたかを問わない、そんな傾向があったように思います。今回の指導要領は、形はこれまでのものを踏襲していますが、

精神においては学習指導要領を指導要録できちんと裏打ちするものになっています。「確かな学力」をつけさせることをねらっているのです。

加藤 説明責任だけではなく、結果責任をしっかりとするために、目標準拠評価を強調したということですね。この目標準拠評価の目標は何かというと、「生きる力」であり、「生きる力」の知的な面である「確かな学力」をつけさせることですね。

2 学習活動と新しい評価の観点

梶田 観点は、教科によっては少し変わりますが、基本的には同じです。しかし、それを裏づけるものとして「習得」「活用」「探究」という学習活動が想定されています。その結果として4つの観点が出てくる、とされているのです。このことがいままでと違うところですね。

加藤 従来の4観点との関連でいうと、「関心・意欲・態度」はそのまま、基本的な知識・技能の「習得」にあたるものが、「知識・

理解」と「技能」であり、「活用」が「思考・判断・表現」になるという対応づけが明確になったということですね。

梶田 そうです。今回は、「思考・判断・表現」を非常に重視していますが、「活用」は多義的ですが、「習得」としての「表現」もありますが、「活用」としての表現力をつけてほしいので、「思考・判断・表現」としての「表現」が、新たな観点です。

加藤 「表現」は従来の観点では「技能」に入れていましたが、新たに「思考・判断・表現」とされたわけですね。

梶田 そうです。その辺りを整理して、「思考・判断・表現」が「活用」と表裏であることをはっきり示そうとしているのです。

3 PDCAサイクル 目標指導・評価の一体化

梶田 教科を超えて言語力を強調したのが、今回の学習指導要

加藤 学習指導要領改訂にもなつて指導要録が改訂されました。これからの学習評価の在り方を梶田先生のお話をお聞きしながら深めていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

学校教育においては目標と内容を示す学習指導要領が入り口で、成果を評価する出口が指導要録だと位置づけられます。入り口の考え方を受けて出口があるわけですが、そのつながりについて、まずお教えください。

1 要録が変わったことより、指導要領が変わったことがポイント

梶田 観点別学習状況の評価の欄があつて、教科の評定があるといる形は、1980年(昭和55年)の指導要録から後は、あまり大きく変わっていません。今回変わった点があるとすれば、以前より目標準拠評価が強調されていることです。

ここで注目したいのは、入り口である学習指導要領が大きく変わったことです。内容が30年ぶりに増えて、レベルも高くなりました。「確かな学力」が強調され

評価の観点

- 国語**
  - 国語への関心・意欲・態度
  - 話す・聞く能力
  - 書く能力
  - 読む能力
  - 言語についての知識・理解技能
- 社会**
  - 社会的事象への関心・意欲・態度
  - 社会的な思考・判断・表現
  - 観察資料活用の技能
  - 社会的事象についての知識・理解
- 算数**
  - 算数への関心・意欲・態度
  - 数学的な考え方
  - 数量や図形についての技能
  - 数量や図形についての知識・理解
- 理科**
  - 自然事象への関心・意欲・態度
  - 科学的な思考・表現
  - 観察・実験の技能
  - 自然事象についての知識・理解
- 生活**
  - 生活への関心・意欲・態度
  - 活動や体験についての思考・表現
  - 身近な環境や自分についての気付き
- 音楽**
  - 音楽への関心・意欲・態度
  - 音楽表現の創意工夫
  - 音楽表現の技能
  - 鑑賞の能力
- 図画工作**
  - 造形への関心・意欲・態度
  - 発想や構想の能力
  - 創造的な技能
  - 鑑賞の能力
- 家庭**
  - 家庭生活への関心・意欲・態度
  - 生活を創意工夫する能力
  - 生活の技能
  - 家庭生活についての知識・理解
- 体育**
  - 運動や健康・安全への関心・意欲・態度
  - 運動や健康・安全についての思考・判断
  - 運動の技能
  - 健康・安全についての知識・理解

領改訂の大きなポイントです。

評価をするには、子どもの言葉  
を的確にとらえなければなりません。思考は外からは見えませんが、思考のありようが言葉として  
どのように表現されているかを見ていかなければならないのです。

**加藤** 指導要録の改訂という話になると、どうしても通知表のつけ方、評定の仕方という話になります。学習指導要領の方針を生かした指導をどう展開するかが大切になってくるわけです。

**梶田** 通知表は学校の責任で作成しますが、様式や記入法は指導要録を参考にしている場合がほとんどです。でも、その中で、わが校では今度の学習指導要領にどう取り組むか、学習指導要領の精神をどうやって授業に生かすか、このようなことを通知表の在り方に反映するように努めなければなりません。非常に大事なところですよ。

**加藤** それと呼応した形で、目標と指導と評価の一体化、PDCAサイクル※1が強調されています。なかなか実現が難しいことですが、それを強調したことは

それを実現していくための基礎になる大事なこと、いわゆる基礎目標が出てきます。

基礎目標と中核目標を支えるものとして、この単元に入る前にはわかっていないといけない知識、ついていないといけない技能といった前提目標があるわけです。

**加藤** 単元学習では、目標分析、目標構造図などで目標を明確化して指導することを忘れてはいけません。

**梶田** そういうきめ細かな目標の明確化は、本来、単元が単位なのです。同じようなきめ細かさです。学期や学年を通しての目標を考えてはいけません。大切なことは、目標をケタによって見極めるということです。

**加藤** 目標をケタによって見極めるということが、「簡素で効果的な評価」に通じるのですね。

**梶田** 目標を明確化したら、その目標についてだけ指導するという発想ではいけません。目標は最小限最低限のものだから、その時その場の教師の思いや気づきで、目標になっていないものも加えて指導するのは当然です。

いいことですね。

中教審の報告の中に「簡素で効果的な評価」とありましたが、評価したものを、目標に照らし合わせて次にどう生かすかというところで、先生方が気をつけたいといけないところを教えてください。

**4 要録・通知表での評価と生かし方**

**梶田** PDCAサイクルといいますが、指導要録や通知表での評価と単元学習での評価とはケタの大きさが全然違います。

指導要録や通知表での評価が生かると単元学習での評価が生かるとは、まったく意味が違うのです。

指導要録や通知表は学年や学期の最後の段階で、この教科ではどういう力がついているかを見るわけです。プロセスを細かく見ているわけではないし、見る必要もないのです。最後の段階でどういう力がついたかだけを見ればいいのです。

**加藤** プロセスまでを細かく見ていこうとするから、指導要録や

実際の教える活動や学ぶ活動は、目標として想定したものを踏まえながら、それを大きく乗り越えたものにならないといけないのです。

したがって、子どもの側でもいろんな力がついているので、目標にしたところだけは最低限チェックして、本当に身につけているかどうかを見るわけです。

**加藤** その辺りが、授業や評価を考える基本的な視点ですよ。膨らみのある授業構成、膨らみのある指導になっていないと、ガチガチの授業になってしまいます。

**6 子どもも教師も楽しければ授業は活性化**

**梶田** 授業は、子どもにとって、教師自身にとっても、楽しくないといけないのです。

教師が目標にがんじがらめにされて、「これをやっておかないといけない」「ここから脱線してはいけない」などと思っていると、授業は楽しくなりません。教師が活性化されなければ、子どもは活性化されませんがありません。

通知表の記入が大変複雑な作業になるのです。

**梶田** 評価の生かし方も、指導要録であれば、次の学年が始まる春休みに何をやらせたらよいかです。あるいは、次の学年の担任へどんなことに留意して指導すべきかを伝えることです。

通知表も基本的には同じで、学期を振り返って長期休暇や次の学期にどう指導するかです。これがPDCAサイクルです。

**加藤** それが指導要録や通知表での評価の生かし方ですね。

**5 単元学習では目標を構造的にとらえて指導**

**梶田** まず、PDCAのサイクル

**加藤** 単元の目標分析、目標構造図といった目標の明確化、それに基づく指導計画の在り方や授業実践の研究が、盛んになるといいですね。

**梶田** 授業研究をすると、先生が自由になる、先生が解放される、ということがわからないといけません。

目標分析と目標構造図をつくと、先生はそれを踏まえて授業をすればいいので、細かいことに縛られず、自由になります。ですから、「これさえやってあげば安心だから、その場で脱線してもいい」ということになるはずですよ。

そうした基本的な認識をふま

のケタが違うことを認識しないとけません。

目標分析、目標の明確化が、先生や子どもをがんじがらめにしてしまうこともあります。

授業では2、3の願いやねらいに絞って、それを念頭において指導します。しかし、それは単元の見通しの中で、ということですよ。

**加藤** 1時限ごとの授業でなく、単元での見通しをもつことが大切なのですね。

**梶田** そうです。例えば15時限の単元の中で、最小限これだけはこの子にも身につけさせたいという最終の目標を2つか3つに絞り込まないといけません。これが中核目標です。

えた授業研究であつてほしいのです。

**加藤** そういう目標の絞り込みがあつて、絞った目標をもって授業に臨んで、そのプロセスの中でうまくできたかどうかを見るのが、本当の評価ですね。

**梶田** よくワークシートに書かせて思考力をつけさせますが、書かれた言葉に着目して、その子の思考力のありようをきちんと見取ることが大事です。

「もうひとつ、これを加えると、さらによくなる」「ここを本人に工夫させるとよくなる」といったことが見取れることが評価のフィードバックにつながるのです。そこがわからないと、何のため



※1 PDCAサイクル:Plan(計画)→Do(実行)→Check(検証)→Action(改善)の流れを次の計画に生かしていくプロセス。

近日  
発刊予定

## 改訂 実践教育評価事典

新指導要録(新しい評価の観点)に対応して改訂!  
これでバッチリ! 教育評価!

教育評価の基礎理論を解き明かし、  
各教科の「授業づくりはどう生かすか」を詳説。  
絶対評価(目標標準評価)の時代に、  
評価の目を大切にしたい教育実践を目指す教師必携の一冊。

監修・著 / 梶田 毅一 (環太平洋大学学長、中央教育審議会教育課程部会長)  
加藤 明 (兵庫教育大学教職大学院教授、中央教育審議会専門委員)

B5判 240ページ 1色刷



〈内容構成〉

- 第1部 授業づくりと教育評価の基礎・基本  
目標と指導と評価の一体化(PDCAサイクル)による授業づくりの方法を詳説。
- 第2部 各教科の指導と評価  
「授業づくりと評価」の方法を、国語、社会、算数、理科、生活、外国語活動で具体的に解説。
- 第3部 対談「これからの評価のために」  
監修の梶田・加藤先生が、新しい評価の考え方を語る。
- 第4部 教育評価の基礎知識  
教育評価の基礎的な用語を見開き1用語でわかりやすく解説。

6月  
発刊予定

## 平成23年度からの新しい指導計画作成のための 目標分析と具体的評価規準

小学校 国語・社会・算数・理科

### 新しい評価の観点に対応!!

「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

監修: 梶田 毅一 (環太平洋大学学長)  
A4判 272ページ 2色刷  
CD-ROM(評価規準シート)付  
定価1,800円(税込)

付録

CD-ROM  
「自校の評価規準」  
書き換えに役立つ!!



好評  
発売中

授業づくりシリーズ

## 新〇〇科の考え方や授業展開 全学年・全領域(全単元)の指導計画例

小学校新学習指導要領 改訂のポイントと授業改善の方法がわかる



定価 2,310円(税込) 定価 2,100円(税込) 定価 2,310円(税込) 定価 2,310円(税込)

「新国語科の考え方や授業展開」  
小森 茂

「新社会科の考え方や授業展開」  
北 俊夫

「新算数科の考え方や授業展開」  
清水 静海

「新理科の考え方や授業展開」  
角屋 重樹

4教科セット 9,030円(税込)



「評価は本来、授業づくりのためにある」  
加藤 どうしても評価が、最後の成績づけ、総合的評価の資料取りだけに終わることが多いといえます。評価は本来、授業づくりのためにあるわけです。  
今回、「習得」「活用」「探究」の学習活動が示され、活用力や応用力が強調され、PDCAサイクルが出たということは、きちんと下ごしらえはするけれど、あとは臨機応変、自由闊達、自由自在に子どもとともに授業を創造していく。そして、少なくとも、ここでは到達しなればいけないというところはしっかりやる、自由になるためにやるというところをえ方でいいですね。  
梶田 まさにそうですね。目標分析をしたり、単元指

導計画をつくったり、それに基づく授業研究でいろんなことを想定することが、教師や子どもを縛る方向ではたいていはいけません。教師は、そこさえ押さえておけば、どんどん楽しい授業が展開できる、というところに気持ちをもっていけるといいですね。  
加藤 「探究」では正答がないものを求め続けていくといわれていますが、そのとらえ方は、単元学習での「探究」なのか、教科での「探究」なのか、教科を超えた総合的な「探究」なのか、どれでしょう。  
梶田 どれもあります。「習得」や「活用」は、文化の体系として各教科を扱っていくことです。文化の体系とは、人類が何千年積み重ねてきたもののエッセンスを次の世代にどう伝えていくかという事です。  
例えば、数量、図形の領域では算数、数学という体系です。その中でポイントとなる点を教えて身につけさせなければなりません。

### 8 「探究」と クリエーティブな授業

でも、教えて、習得し活用するだけでは十分でないのです。教えられたものを土台にしながら、それがまったく違う形で使いこなせるようにならないといけません。その、まったく違う形で、というのが「探究」です。  
加藤 そこで大事なものは、正解を一度壊して、拡散思考でイメージを広げること。そして最後は、文章でも作品でも、いまままでにない要素が加わったものが欲しい、ということになりますね。これはいまままでの学校教育の殻を破るもので、これからの子どもたちに特に求められるものといえますね。  
梶田 文化をきちっと伝達することも大事だけれど、それを主体的に自分自身のものとして使いこなす、従来とは違う新しいものが出てくることも大事です。社会が前進するためには、次の世代が伝えられたものを打ち破って、新しい要素を入れたものを打ち出してくれないといけないのです。そこがいまままでの日本の学校教育では弱かったという反省があります。  
加藤 梶田先生がよく言われ

る、芸事の「守・破・離」(※)というなら、「破」であり「離」ですね。これを総合的な学習の時間だけでやるうとする、どうしても狭いものになります。  
梶田 総合的な学習の時間は、そういうところを特に念頭に置きたいわけですが、それだけでなく、本来「探究」はあらゆる教科が必要です。「破」「離」ということが大事なのです。  
加藤 そういったクリエーティブな授業が展開されると、子どもが身につけた力も多様ですから、それを言葉で取り出す先生の眼力も重要になりますね。  
梶田 そうですね。先生が本場の評価の力をつけるためには、教材研究、授業研究などが大事です。それをふまえて、子どもの変化や学びの結果について先生の眼力が育たないといけません。  
加藤 授業創造文化の再興ですね。この精神を生かして、どう推進していくかがわたしたちのこれからの課題ですね。  
本日は、ありがとうございます。

※2 「守・破・離」:芸事などの習熟過程。  
「守」は型や技の基本を学ぶ段階。  
「破」は工夫して発展させる段階。  
「離」は独自の新しいものを確立させる段階。

梶田 毅一先生の教育コラム開設!

ぶんけい 教育コラム

検索